

東京都児童福祉審議会 第5回専門部会 議事録

1 日時 令和7年12月1日（月）17時59分～20時03分

2 場所 都庁第一本庁舎 42階北側 特別会議室B

3. 次第

(開会)

1 議事

(1) 中間報告（案）について

2 今後の予定等

(閉会)

4. 出席委員

横堀部会長、新保副部会長、大竹委員（オンライン出席）、牛島委員、慶野委員、四条委員、高橋委員、長田委員、中村委員、林委員、堀口委員、渡辺委員

5. 配付資料

資料1 東京都児童福祉審議会専門部会委員名簿及び事務局名簿

資料2 里親等委託の推進について（中間報告【案】）

参考資料 東京都社会的養育推進計画

第4回専門部会資料

開 会

○育成支援課長 お待たせしております。

定刻より少し早いですが、皆様おそろいですので、時間も限られておりますので、始めさせていただきます。

本日はお忙しい中、御出席いただきましてありがとうございます。

私は、事務局の書記を担当させていただきます、福祉局子供・子育て支援部育成支援課長の六串です。よろしくお願いいたします。

開会に先立ちまして、委員の方の出席状況について報告させていただきます。

本日、委員の皆様は御出席いただいております。大竹委員におかれましては、オンラインにて御出席いただいております。

なお、本日は、前回に続き、世田谷区の里親支援センターともがきのセンター長、岩田様に御出席をいただいております。

次に、本日の会議資料についてですが、お手元のタブレットで御覧いただけますので、御確認をお願いいたします。

会議次第に記載のとおり、資料１と資料２の他、参考資料がございます。

タブレットにつきまして、不具合、不明な点などございましたら、近くの職員までお声がけください。

なお、本部会は公開となっております。後日、議事録は、東京都のホームページにて掲載されますので、よろしくお願いいたします。

また、御発言に際しましては、挙手の上、マイクをご使用いただければと思います。

それでは、ただいまから東京都児童福祉審議会第５回専門部会を開会いたします。

この後の進行は、横堀部会長をお願いいたします。

○横堀部会長 横堀でございます。皆様、こんばんは。

あっという間に、１２月の第５回の専門部会となりました。本日もどうぞよろしくお願いいたします。

今日は、大竹アドバイザーはリモートで御参加ということで、どうぞ適宜御発言いただきたいと思います。

それでは、早速、審議に入ってまいります。

前回の第４回までの専門部会では、事務局から御提案がありました論点案それぞれについて御議論を重ねていただいていたところでもあります。これまでの御意見を踏まえて、中間報告の素案を整理しております。そこで、本日は、素案の議論をメインに進めてまいりたいと思います。

中間報告の内容の議論に入ります前に、まず、今後の進め方について、事務局から御説明をいただきたいと思います。

それでは、御説明をお願いいたします。

○育成支援課長 それでは、事務局から先に今後の進め方から説明させていただきます。

これまで専門部会では、５回にわたって現状、課題の共有と論点整理を行った上で、４つの取組の柱に沿って御議論いただいております。本日は、これまでの検討内容を文章にまと

めたものを中間報告の案としてお示しさせていただき、不足するところは更に御意見をいただきたいと考えてございます。

中間報告としましては、令和8年1月22日に予定しております本委員会にお諮りして、取りまとめをいただく予定で考えておりますので、本日は、案のたたき台として、この後は事務局から説明させていただきます。

その上で、本日いただいた御意見の反映の方法につきましては、委員の皆様にご了承いただければ、横堀部会長に御一任いただきまして、具体的な表現などの記載内容につきましては、事務局と横堀部会長との間で詰めさせていただきたいと考えております。

令和8年1月22日の本委員会当日は、委員の皆様にも御出席をお願いしているところですが、専門部会の委員の皆様には、事前に案をメールでお送りするようにいたしますので、もし更なる御意見がございましたら、改めてその際にメールでお寄せいただくことも可能でございます。

その上で、本委員会には専門部会以外の委員の皆様も出席されますので、改めて中間報告案の内容と令和8年度の進め方について、事務局から説明させていただく予定です。

令和8年度の専門部会につきましては、中間報告を受けた対応につきまして少し都庁内での検討のお時間をいただきまして、新たな論点の整理をした上で、早くても令和8年3月下旬から4月以降に第6回を開催する予定ですが、こちらにつきましては別途改めて日程調整をさせていただく予定です。

また、令和8年度の開催回数につきましては、第1回専門部会にて今後の予定といたしまして第6回から第10回の計5回の予定とお示ししてございましたが、こちらも中間報告を受けました新たな論点の整理の状況に応じまして、また改めて整理した上で皆様にお示しさせていただく予定です。

最終的には、こちらの専門部会での検討を踏まえた最終提言といたしまして、令和8年秋までの取りまとめをお願いしたいと考えてございます。従いまして、令和8年度の専門部会につきましては、更に論点を絞った上で、令和7年度よりも前倒しで開催してまいりたいと考えてございます。

委員の皆様には大変お忙しい中、2か年にわたる検討に御協力いただきまして、大変恐縮でございますが、何とぞ引き続きのお力添えをお願いいたします。

事務局から今後の進め方についての説明は、以上でございます。

○横堀部会長 どうもありがとうございました。

ただいま、今後の進め方についての御説明をいただいたところであります。

委員の皆様から進め方について、御質問や御意見はおありでしょうか。

御説明を受けたということですのでよろしいでしょうか。

目安としては、令和8年1月の本委員会での報告、その後、6回から10回までの議論をしながら令和8年秋の取りまとめに向けていく流れで、これからも大事な議論が続きます。

ただ、今回から次回まで少し時間が空きますので、本日を踏まえて、必要な意見はこの後もお聞かせいただけたらと願うところであります。どうぞよろしくお願いいたします。

では、進め方についてはよろしいでしょうか。

(首肯する委員あり)

○横堀部会長 ありがとうございます。

それでは、続きまして、中間報告の素案についての御説明を早速お願いいたします。

○育成支援課長 続きまして、事務局から中間報告の素案につきまして説明させていただきます。

資料2「里親等委託の推進について（中間報告【案】）」を御覧いただければと思います。

まず、1ページから2ページまでに全体の骨格をお示ししてございまして、こちらが実際に中間報告の目次にあたってくるものと考えてお示しさせていただいております。

全部で第1章から第4章までの計4章構成で考えてございます。

まず、「第1章 里親等委託の現状」から「第2章 里親等委託の推進における課題」までにつきましては、第1回専門部会で事務局からお示しさせていただいて委員の皆様にも御確認いただきました全体を通しての現状、課題につきまして整理し、検討いただいた内容について整理させていただいております。

また、「第3章 里親等委託の推進に向けた取組について（中間報告）」、「第4章 令和8年度に向けて引き続き検討を要する主な論点」が具体的な中間報告案ということで、特に令和8年度、短期的な取組として、第3章の中で里親等委託の推進に向けた取組中間報告の核になる部分としてお示しさせていただいております。これまで4つの取組、取組1から取組4までそれぞれ各論点についてここまで御検討いただいていたところですので、その内容に沿いまして第3章で取りまとめを考えてございます。具体的にはこの後また御説明させていただきますが、具体的に令和8年度に向けた短期的な取組について、基本的には第3章でまとめさせていただいております。ここまで各論点について、中長期的な要素も当然それぞれの中に含まれておりますが、こちらにつきましては第4章でまとめて事項として挙げさせていただいております。

具体的な中身を見ていただきながら説明させていただきます。

「第1章 里親等委託の現状」、「第2章 里親等委託の推進における課題」につきましては、現状、課題の部分ですので御覧いただきますとして、「第3章 里親等委託の推進に向けた取組について（中間報告）」、14ページをお開きいただければと思います。

14ページ以降、第3章で中間報告案としましてまとめさせていただいております。

第3章の「取組1 登録家庭数の拡大、制度運営の見直し」からですが、まず、「論点1 養子縁組里親への働きかけ（二重登録）」に関しまして、「（1）現状・これまでの取組」、「（2）課題」、「（3）当面の取組の方向性」といった形で論点1となっておりますが、この形式に沿いまして、15ページに「論点2 親族里親・養育家庭（親族）制度等の積極活用」といたしまして、同様に「（1）現状・これまでの取組」、「（2）課題」、「（3）当面の取組の方向性」という構成で各論点についてお示ししてございます。

以降、同様に、16ページに「論点3 フレンドホーム制度の積極活用」。17ページに「論点4 施設から里親等への措置変更の促進」。18ページに「論点5 大都市特性に合わせた制度運営」、「論点6 ファミリーホームの設置促進」。19ページに「論点7 里親・ファミリーホームへの費用支弁」、こちらにつきましては、前回までの資料では論点7、論点8とお示ししておりましたが、こちらの中間報告案としましては、論点7としてまとめさせていただいております。

また、20ページから「取組2 里親等に対する支援の充実」としまして、「論点1 里親向け子育て支援サービスの充実」。21ページに「論点2 里親・里子・実子への支援の充実」。「論点3 フォスティング機関事業の評価を踏まえた里親支援センターの検討」。

22ページ以降、「取組3 特別養子縁組に関する取組の推進」といたしまして、「論点1 代替養育における特別養子縁組の優先的な検討」。23ページに「論点2 児童相談所長による特別養子適格の確認の申立の積極的な検討」。24ページに「論点3 乳児院の体制拡充」。25ページに「論点4 縁組成立後の継続支援」。

26ページ以降に、「取組4 ソーシャルワークの充実による里親等委託の促進」といたしまして、「論点1 児童相談所の体制強化」。27ページに「論点2 待機中の里親へのショートステイの委託」。28ページに「論点3 里親や候補児童に関する情報の取扱いのDX化」というところで、各論点につきまして、短期的に令和8年度に向けて具体的な取組として挙げさせていただいております。

29ページから「第4章 令和8年度に向けて引き続き検討を要する主な論点」としまして、中長期的に、具体的には令和8年度の専門部会で引き続き御議論いただく事項として考えているものをまとめさせていただいております。

大きく4つ挙げさせていただいた上で、5番目として「その他」としております。

1番目、「フレンドホーム制度と養育家庭制度の一体的運営」につきましては、「取組1 登録家庭数の拡大、制度運営の見直し」の最初の論点として挙がっておりますが、フレンドホーム制度につきましては、引き続き御議論いただきたい内容としまして、養育家庭制度と一体的な運営として、未委託家庭の活用やマッチング率の向上を目指していくための仕組み、ルール、プロセスの検討などを引き続き御議論いただきたいと考えております。

2番目、「包括的な里親支援体制、機能の充実」ですが、こちらは現状フォostリング機関事業といたしまして、委託事業として実施してございます。こちらにつきましては、法定の事業であります里親支援センターへの移行の検討や、児童相談所との役割分担などについて検討が必要と考えてございます。また、里親支援だけではなくて、里親家庭の支援という広い意味で、実子、里子も含めた家庭への支援といった事項も引き続きの検討事項と考えてございます。また、休日、夜間などの体制についても検討が必要と考えているところです。3つ目の○ですが、施設から里親への措置変更後の支援といたしまして、施設による心理ケアなどの専門的支援の継続など、広い意味でのパーマネンシー保障の在り方についても引き続き検討が必要と考えているところです。

3番目、「里親・ファミリーホームと社会福祉法人等との連携」です。こちらは、ファミリーホームの設置促進だけでなく、施設を運営している法人との連携というところで、里親・ファミリーホームとの連携の在り方について、こういった仕組み、制度がより効果的な在り方として考えられるかというところを引き続き検討事項として考えてございます。

4番目といたしまして、児童相談所における「養育家庭専門チームの設置」、これは仮称ですが、こちらについても引き続き検討していきたいと考えております。

最後に、「その他」といたしまして、ここまで挙がっていない論点につきましても各項目に沿ってまとめさせていただいているところです。

非常に雑駁ですが、事務局からの説明は以上とさせていただきます。

また御質問等がありましたら、適宜お願いいたします。

○横堀部会長 御説明ありがとうございました。

ただいま中間報告の素案についての組立てと、どのように今書き込んであるのかということのを少し具体的なところも取り上げながら御説明いただきました。

皆様はあらかじめお目通しいただいているかと思いますが、第3章からが主に中間報告の内容的なところになるということで御理解いただけたのではないかと思います。

それでは、以後、ここからの時間は、皆様の御意見、御質問などで意見交換の時間に移ってまいりたいと思います。

今日は、とにかくこの内容について意見交換する貴重な時間と思っておりますが、時間の目安といたしましては1時間半ほど、午後7時45分ぐらいを目指しまして、各パーツ全部を開いてしまうと大変かと思しますので、少し場所を決めながら、その辺りについての意見を集中していただけたらと私は考えております。

今日は、文章そのものはこれから事務局でも、また、最後には私との連携の中で育てていくということで、書きぶりはバージョンアップしていくわけなのですが、それぞれの既に委員の皆様からいただいた意見が反映されながら仕立て上がっているところ、もう少しこのように書き込んだほうがよいのではないかと、内容的に加えたいものも頭の中に出てくるかなと思うのですが、まだ出てきていないところで、もう少しこういう観点を組み込む必要があるのではないかとということももしかしたらあるかもしれません。ですので、加えての御意見と、もう少しこういうところを強調したり、意見として入れていただきたいみたいなことが少し多様に出てくるかなと思いますので、それぞれのパーツで委員の皆様から具体的にお出しいただけたらと思っております。

それでは、まず「はじめに」から「第1章 里親等委託の現状」、4ページからは現状の確認、「第2章 里親等委託の推進における課題」が課題の確認ということで、事務局で整理していただいている部分なのですが、この辺りで何かお気づきの点がある方はいらっしゃいませんか。現状の把握と課題はこのとおりでよろしいかということ、御一緒に見ていただけたらと思います。

それでは、まず、第1章の4ページから第2章が始まる10ページまで現状の整理です。この辺りで何かお気づきの点はありますか。

何かありましたら、お願いいたします。

状況として、共に把握するということでしたらよろしいのですが。

高橋委員、お願いいたします。

○高橋委員 数字の根拠というか内容を聞きたいのですが、5ページの「3 現状分析」の「(1) 養育家庭の状況」の2つ目の○で、「28件存在している」という28件は、都の児童相談所と区の児童相談所も合わせた数字でしょうか。

○横堀部会長 ありがとうございます。

まずは1点ですね。

では、お答えいただけますでしょうか。

○育成支援課長 5ページ下段につきましては「都区合計」とありますとおり、こちらの○の文章中の28件につきましても、都区合計の数字と御確認いただければと思います。

○高橋委員 ありがとうございます。

○横堀部会長 ありがとうございます。

そうですね。

都と、区と、今、両方の取組・実践がともに動いておりますので、随所に確認が必要かもしれません。

色々と搭載していただいている言葉があろうと思いますが、今のように御不明な点や確認が必要なことなども御質問で出していただけたらと思います。

いかがでしょうか。

「第1章 里親等委託の現状」の始まりは、委託率、委託児童数の推移ですね。今の「3 現状分析」で「(1) 養育家庭の状況」がございました。あとは、登録者の状況が続いてまいります。未委託の方のことも出ておりますが、その後も含めまして、9ページまでいかがでしょうか。

あるいは、この点はどうしてこうなのかということももしありましたらどうぞ。

では、岩田さん、お願いします。

○里親支援センターともがき 岩田センター長 里親支援センターともがきの岩田です。

今、高橋委員からお話があった28件の候補児童のうち、マッチングに至っていない児童の数に関して「令和7年6月現在」という記載になっておりますが、これが全体のうちどれぐらいの割合で、28件が多いのか少ないのか。そして、中間報告に記載するかどうかは別としてですが、これは長期的に委託が決まらずにいらっしゃる子供なのかとか、理由など何か分かれば参考までに知りたいと思いました。

お願いいたします。

○横堀部会長 お願いできますでしょうか。

○育成支援課長 全体の規模は今確認しますので、少しお時間をいただければと思います。

まず、28件につきましては、時点で捉えた令和7年6月末時点で、推薦が挙がっているけれども決まっていない児童がこれだけいらっしゃるという状況でございます。これは瞬間風速的にこの時点でというところですが、中には、児童側からは委託可能な児童として挙がっているけれどもなかなか決まらずに長期化している、本当に長いケースですと1年近く委託先となる里親が見つからないというケースも中にはございます。定期的に育成支援課で全体把握をしていますが、児童相談所と情報共有しながら進行管理を徹底していくというところでは実施しております、こういった長期化している児童に関してなぜ委託先が見つからないのかというところは、我々も考えながら業務を進めているところでございます。

全体の中の件数は、確認できましたら後ほどまた説明させていただきます。

○横堀部会長 岩田さん、いかがでしょうか。

○里親支援センターともがき 岩田センター長 ありがとうございます。

というのも、年間でどれぐらいの子供が候補に挙がっていて、どれぐらいマッチングに至っていない状況があるのか、マッチングに至らない状況はボトルネックになってきて、これから解決していかなければならないところだと思うので、その状況の詳細が分かればと思いましたので、よろしくお願いいたします。

ありがとうございます。

○横堀部会長 ありがとうございます。

マッチングに係る部分につきまして、ほかの委員の皆様から何かおありの方、いらっしゃいますか。

林委員、お願いいたします。

○林委員 「はじめに」の○の4つ目に「家庭養育優先原則」が掲げられていると。その上で、今出ています養育家庭委託候補児童は、どういう基準でもって候補としているのか。

つまり、家庭養育優先の原則はそもそも全ての子供が家庭委託されるべきであるという原則だと思うのですが、この候補児童はその原則と矛盾するようにも感じて、これはそもそもどういう基準なのかとか、それは各施設によって違うのかとか、そういうことも含めて基本的なことをお伺いしたいのです。

○横堀部会長　お願いできますでしょうか。

○育成支援課長　御指摘のとおり、まず「はじめに」にありますとおり、家庭養育優先の原則は、社会的養育になっている東京都内に約4,000人いる児童全てに当然関わってくる考え方であると考えてございます。

一方で、個々のケースで考えていくときには、施設への措置が望ましい児童もいらっしゃる中で、実際に個々のケースを検討する中で、これは施設がというよりは児童相談所、具体的にはケースを持っている子担当の児童相談所において、このケースに関しては里親委託が可能であるということで候補児童として、もちろん施設の意見とも調整しながら児童相談所のほうで推薦を挙げているケースでございます。

ここから先は少し事務フローの説明になりますが、児童相談所のほうで里親委託が可能である候補児童として推薦しますと、都庁の育成支援課にこの情報が上がってきまして、こういった児童が里親委託可能な児童として、候補児童として挙げられているという情報を全ての児童相談所にフィードバックしまして、今度は親担当の児童相談所、各児童相談所の里親担当のほうで、当該の児童に対して里親委託が可能な里親がいるかどうかという検討をすることになります。

先ほどの時点で28件という児童は、その状態でその先が決まっていない状態になっているところですが、もちろんケースを検討する中では第一に里親委託、家庭養育を優先して検討するのですが、その中でも、里親委託候補児童として挙げてきた上で候補児童に対して適切な里親が見つかれば里親委託として決まっていくのですが、その状態でまだ里親側の候補が決まっていない状態の児童が28件いらっしゃるという状況でございます。

○横堀部会長　林委員、いかがでしょうか。

○林委員　結構です。

○横堀部会長　よろしいでしょうか。

ありがとうございます。

この専門部会では、以前の回でも、令和6年に次期社会的養育推進計画策定要領で国が示されていましたが、代替養育されている子供のパーマネンシー保障に向けた取組という部分から、国がパーマネンシー保障をどのように整理しているかということを御一緒に押さえました。本日もそれをメモで持ってきましたので、1回確認したいと思います。

代替養育の子供に対しては、児童相談所において、まずは家庭復帰に向けて最大限努力することが1番目です。2番目としては、それが困難と判断される場合には、親族、知人による養育を検討することが来ております。3番目には、更には、特別養子縁組を検討し、これらが子供にとって適切でないと判断される場合、要するに適切でないというケースの場合は、4番目として里親などへの委託や、5番目として児童福祉施設などへの措置を検討することです。国としてはそのような優先順位をつくり、パーマネンシー保障の内容について示しながら計画策定を迫ったのが、令和6年度の策定要領の際の文言でありました。東京都でもこの整理のしかたをふまえて対応されています。

ですので、そのような整理をふまえた上でパーマネンシー保障という言葉を理解しながら使っているところではあるということも添えさせていただけたらと思っております。

渡辺委員、お願いいたします。

○渡辺委員 不勉強で申し訳ないのですが、この資料は何に使いたいのかというのをもう1回確認したくて、これが指針になるのか、それともお願い書になるのか、どちらになるのですか。指針ですか。

○育成支援課長 この中間報告の位置づけが最終的にまとまった後の使われ方ということでよろしいでしょうか。

○渡辺委員 そうです。

○育成支援課長 中間報告といたしましては、児童福祉審議会から東京都への、最終提言はまた令和8年度になりますが、委員の皆様の御提言として、中間時点での取りまとめということですが、最終的には御意見として東京都がそれをいただくという形になります。ですので、委員の皆様から東京都に対する意見として、我々が受け止めさせていただきます。

それを踏まえて、今度は、東京都の実際の施策・事業にどう反映していくかというための参考といえますか、そのための報告書ということで受け止めていただければと思います。

○渡辺委員 理解しました。

ありがとうございます。

であれば、気になるのが、まず、3ページ目の「はじめに」なのですが、この報告書が行く行く指針になるということであれば、もう少し言葉はこだわったほうがよいかと感じまして、家庭養育優先の原則もパーマネンシー保障も、どちらも子供の権利にのっとった形で養育を進めていきたいと思いますということの細分化の話だと思うのです。ですので、そもそも子供の権利を、子供自身が家庭で育つことのできる権利を進めていくために家庭養育優先の原則があるし、パーマネンシー保障があるねということになると思うので、「子供の権利にのっとり」とか、「子供の権利」という言葉を入れないと、突然というか、細分化されたものをただ言っているだけになっている気がするので、そもそもこの2つがあるのは子供の権利があるからだよねと書いたほうがよいかと思います。

一応、こども大綱も見たのですが、「こどもの権利にのっとり」と1発目に書いてあるので、もしよかったらそこも見てもらえるとよいかなと。

2点目なのですが、10ページの「第2章 里親等委託の推進における課題」に関してなのですが、今まで色々なことをたくさん言っていたはずなのに、こんなにふわっとしているのかと思ってしまいまして、何の理由があるから委託家庭が増えないのかというところをもう少し書いてあげないと、おそらくこれを見た23区とか多摩地域の東京都の里親家庭の担当者の方々は、なるほどこれが課題だよね、ではこのようにアプローチしていこうということが、正直、未委託家庭や人材確保とかは表現として割とふわっとしていると思っています。養育に関して自信を持ってお願いできる里親が少ないところが1番ダイレクトな理由だと思うのですが、そこがどのように書かれるのかあれなのですが、そこが1番の理由なのではないかと思っていますので、それをこちらがお願いできる里親をどのように増やしていったらよいかというところのアイデアが始まっていくと思うので、その部分をもう少ししっかり書かないと、これはただ業界の中にいる人が暗黙の了解で分かっている課題なだけであって、建前と本音の、本音の部分が全く見えない、建前でしか語られていない課題だなと、見ていて感じてしまいました。

ただ、書き方は本当に気をつけたほうがよいと思うので、逆に専門職の人たちに聞きたいと思っている次第です。

以上です。

○横堀部会長 9ページまでの現状の確認と、第2章で書いていかれる課題の確認を併せてもう少し明確に、具体的に書いたほうがよいという御意見でよろしいですか。

○渡辺委員 はい。

○横堀部会長 特にこの部分が気になるとか、そういう点がさらにありますか。

必ずしもそうではなくて、要は、こういう観点で仕立てていったほうがよいというご意見として受け止めることでよろしいですか。

○渡辺委員 そうですね。

登録家庭はせっかくいるのに、児童を受託している家庭が1割しかいないのは、今のところ、何でなのだということが書かれていない。突然、「養子縁組里親の二重登録の促進や、フレンドホーム制度と養育家庭制度の連携による養育家庭の活用など、未委託家庭の活用に向けたより一層の取り組みが必要である」と。これは、受託している家庭が少ないからこういう活動をしたいいねという具体的な案であって、なぜ1割しかいないのかということが書かれていない気がするのです。書けない理由がたくさんあるのだろうと察するのですが、察することができる人は、正直、この業界が長い人なのです。しかし、これがあと少なくとも5年使われる報告書になるのであれば、どんな担当者が見てもここが課題だと、1年目の新卒でも分かるような書き方をしてあげないと。これだと業界が長い10年選手ぐらいの人たちでないと、なぜなのかが分からないかと、率直に思っていました。それをまた民間が引継ぎしていくのか。しかし、おそらく民間も毎年プロポーザル方式で契約していく形態なので、こちらとしても負荷がかかるわけです。であれば、きちんと東京都の、自治体の資料として、明確に課題がこれです、このように見立てていますと書かないと、課題に対してのアプローチがどこも打てないと率直に思っていました。

しかし、おそらく表現は本当に気をつけたほうがよいと思うので、逆に御意見いただきたいと思っています。

以上です。

○横堀部会長 わかりました。ありがとうございます。

今、進行上、現状の確認の9ページまでと区切ったつもりでしたが、10ページ以降のところが抱き合わせで出てきたと思います。現状の課題分析にあたる部分といたしましょうか、それらを書き込むかどうかにつきましては、まずは文章を仕立ててくださいました事務局の方針、お考えはどうであったか、少し御説明いただきたく思います。いかがでしょうか。

○育成支援課長 10ページですが、まず、御指摘の1割に関しましては、養子縁組里親のところですので、○が4つあるうち、2つ目のマッチングとの関係と、一方で、養育家庭の未委託家庭の状況と、養子縁組里親の未委託家庭の状況は少し分けて考える必要があるかと考えております。

先に1割という数字が具体的に出ている養子縁組里親から申し上げると、養子縁組里親は、養子縁組の委託候補児童となる児童の数自体が限られているとこちらにもありますとおり、そもそも養子縁組の候補児童が限られている中では、一方で、里親として登録を希望される方の中には、養育家庭よりも養子縁組里親を希望される方のほうが登録が進んでいるところもあり

ますので、その関係で1割に留まっているところがございます。

一方で、先ほどの養育をお願いできる里親、未委託家庭がある一方で、必ずしもお願いできる児童との関係で難しいようなケースもあるところはマッチングの問題になってきますので、そこはまたどのように書くのがよいのかということは、御指摘のとおり、なかなか難しいところもありますので、我々も児童相談所から意見を聞いたりヒアリングしたりしているのですが、文章化をどのようにするかは少し検討のお時間をいただければと思います。

○渡辺委員 ありがとうございます。

○横堀部会長 よろしいでしょうか。

○渡辺委員 はい。

○横堀部会長 ありがとうございます。

課題が書かれてています9ページまでのところで使えるデータを示しながら状況を描き、第2章で課題に踏み込んでいくということかと受け止めております。

それら両方は確かに抱き合わせでありますね。

ありがとうございます。

先ほどマッチングのところが質疑で出ましたので、私からも1点添えさせていただきたいと思います。

私も、東京都の都市部の規模感で、数も多い里親家庭と委託候補児童のマッチングはとても難しい課題で、課題を抱えながらも現場の御努力があると拝察してきております。

ただ、先ほど5ページで、岩田さん、高橋委員からも御質問が出ましたマッチングのことで、点として描くのではなくて、長期にわたって委託候補児童になりながらマッチングに至らない子供がどのようにいるのかを含め、全部データではないかもしれませんが、マッチングをめぐる課題がもう少し状況として分かるような示し方をぜひこの機会にさせていただきたい、後の討論に向け深まるようにポイントを工夫していただけるとありがたいと思っておりました。ですので、その点を申し上げたいと思います。

それでは、私が述べるだけでなく、まずは「はじめに」から現状を描いている9ページの辺りで何かご意見がありましたらいただきたいと思います。いかがでしょうか。

長田委員、お願いします。

○長田委員 長田です。

5ページの「3 現状分析」の「(1) 養育家庭の状況」のマッチングの部分なのですが、「令和7年6月現在で28件存在している」と記載いただいておりますが、これだけではなくて、可能であれば、マッチングに至らなかった、候補児として取り下げることになってしまった、里親委託に至らなかった子供の数であったり、なぜ至らなかったのかという内容分析みたいなところがあると、後半のケアニーズの部分につながるのかなと思いますし、せっかく候補に挙がっている子供たちをどのように私たちが考えていくかという部分では大事な現状分析のかなと考えました。

○横堀部会長 ありがとうございます。

その部分にも一言いただけますでしょうか。

○育成支援課長 先ほど横堀部会長からいただきましたマッチングの状況のデータに関しましては、どれだけの候補児童がそもそも年間候補児童として挙がって、そのうちこの時点で28件ということですが、そもそも年間で候補児童として挙がった児童のうち何件マッチングに至

ったのか、逆に、その時点でマッチングに至らなかった児童がその後どうなっているのかというところも、どのような形でお示しできるかは少しお時間をいただいて、何らかデータとしてお示しできれば検討したいと考えてございます。取下げになった児童の数は、そもそも統計としてうまく取れるかどうかというところも課題としてあろうかと思しますので、何らかマッチングの状況が分かるようなものは検討させていただければと思います。

○横堀部会長 林委員、お願いします。

○林委員 優先の原則の基準は明確に東京都としてあるわけではなくて、あくまでもそのときそのときの児童相談所の担当者の基準という理解でよいですか。

○育成支援課長 現状はそうです。

○林委員 もう少しそこを具体的に、なぜ候補に挙げたのかという理由、そちらは明確になると思うのです。どうして候補にならなかったかというのはなかなか難しいところなので、そこを明確に見える化していただかないと。そもそも母数は4,000人でしょうという思いがどうしても強い。

それから、マッチングそのものの在り方ですね。今どのようにマッチングされているのか非常に不透明で、もう少しどういう範囲で行われているのかとか、せっかく児童相談所が各区にできたわけですが、区でどのように対応されているのか、全域でどのように対応されているのかとか、そういうシステムの検討は非常に大事なかなと思いました。

以上です。

○横堀部会長 ありがとうございます。

ここにおられる委員の中でも、お詳しい方、実務にあたられている方はそのような実際を御存じだと思うわけです。区児童相談所が設置になって、区内の里親に区内の委託候補児童をなるべくマッチングしようとしておられるのだらうとも拝察してきました。一方区内里親・区内候補児童の検討にとどまらずオール東京でのマッチングを願って、全都のレベルでの候補に出していく辺りが実質どうなっているのか多様な工夫を試みているけれどもマッチングはどの辺りが難しいのか等、そういったことも今回の検討課題に関係すると思います。そこで、そのような具体的な理解を委員の方たちとそろえられるとよいとも思っています。今回資料を拝見して感じたところですので、もし委員の理解をそろえていけるような機会がこの先でまたいただければお願いしたいと思います。ただいまのコメントについて最低限、お答えをいただけますか。

いかがでしょうか。

○育成支援課長 まず、理念としての家庭養育優先ということだけではなくて、具体的にどういった基準で里親候補児童に挙げていこう、推薦しているのかが見えないというところは、今御指摘としていただいたところです。

当面の取組の方向性としまして、今後家庭養育を推進するためのフローチャートとか、そういったところも各児童相談所において児童福祉司が活用できるような標準化ツールのようなものも検討していきたいと考えております。

それがすなわちどのようにフローチャートの中で候補児として挙げていくのかという一つの基準にはなってくるのかなと考えておりますので、これが児童福祉司の勘と経験みたいなことではなくて明確な基準として共有できるようなものは検討していきたいと考えているところです。

○横堀部会長 新保副部会長、お願いいたします。

○新保副部会長 せっかくフローチャートをお作りいただくということですので、前回の会議でも申し上げましたが、今の時期、DX、人工知能を活用することを積極的に導入する時期だと思います。

特に里親委託というとても難しいテーマについて、マッチングについては、私ども人間は先入観があってできるだけ保守的に動こうとするというのが、私にもあると思います。今この発言をするかどうかをめぐって非常に悩んでいたのと同じように、保守的になると思います。

私は生の事例を持っていないので、今自分の研究として、人工知能を使ってモデル事例の分析をしています。例えば幾つかの代表的な人工知能を使わせていただいてモデル事例を分析すると、里親委託、つまり、児童の最善の利益という視点から措置を考えてくれと言うと、人工知能は里親委託をかなり優先的に判断してくれます。こういうことも人工知能は里親委託にするのだと、私も学ばせていただいています。これが全部正しいかどうかは分かりません。しかし、人間が判断する前の段階で、先入観のない人工知能に一度分析してもらって、その上で結果を見て、人間が、児童相談所の専門職員が判断することをやってもよいのではないかと思います。もうその時期に来ていると私は思います。今ちょうど令和8年度に向けて、別の案件で人工知能を活用した児童福祉の在り方について検討をしているのですが、そこでも実際に使ってみると非常に密度の高い分析を人工知能はしてくれます。ですので、東京都が全国の先を走る形で、マッチングについて人工知能の意見を聞いてみるという仕組みを先ほどのフローチャートの中でお使いになられてもよいのではないかと、もうそういう時期に来ているのではないかと思います。

人工知能の判断について、児童相談所の方々と意見交換をすること、民間で里親委託をされている方と意見交換をしてみること、人工知能の考え方と現場で働いていらっしゃる方との意見を擦り合わせてみるということをする時期に来ている、これがおそらくマッチングが進まないというテーマについて、次の一步を東京都が歩む上で必要なルートではないかという気がいたします。

第2章以降でも幾つか出てくるので、またそのときに議論があれば、追加の意見を述べさせていただきます。

どうぞよろしくお願いいたします。

○横堀部会長 それは、意見としてでよろしいですか。

では、現時点でのお答えをいただくのではなくて、意見として扱わせていただきます。

ありがとうございます。

それでは、今色々と御質問などいただいてきましたが、最初の9ページまでのところは、また状況を確認して課題を描くということ、またセットで内容を育てていくということによろしいでしょうか。

(首肯する委員あり)

○横堀部会長 ありがとうございます。

私は、文章として描けるのかは分かりませんが、ぜひ不調ケースについて扱っていただければと思って、資料を拝見しておりました。何ををもって不調と定義するかということがまずは難しくもあると思います。しかし、里親家庭への子供の委託そのものがゴールではありませんので、不調ケースからの学びも必要と感じる次第です。委託後子供がどのように里親家庭の中で、

あるいはファミリーホームの中で養育を体験して、その後どうなっていくのかと見ていったときに、色々なことが起きていると思うのです。委託の推進は、養育、自立の支援やその後につながるプロセスの保障をしていくことと同義でありますので、そういう段階にもつながる、今後を考えさせる課題に結びつく状況をぜひ出していただけるとありがたいと考えています。

不調のケース事例を一つ一つ見ていけば、そもそものマッチングに無理がなかったか等、具体的課題に行き着くことも多いと思われます。ただ、データとして何が言えるかは難しくはあるでしょう。ですが、チャレンジしていただければありがたいということが、付け加えたい意見です。

それでは、第2章の課題の描き方から、なるべく早く第3章にも入らせていただこうと思っております。

それでは、10ページからです。

10ページから13ページまでの4ページ分です。

こちらの課題に、もう少しここをこのように付け加えたり、書き込んだりしたらよいということがもしありましたら、お聞かせいただければと思います。

いかがでしょうか。

先ほど渡辺委員も触れてくださったところも確かにあるかと思います。課題は課題で、納得されていらっしゃいますか。

では、新保副部長、お願いいたします。

○新保副部長 13ページの冒頭に「4 児童相談所におけるケースワーク上の課題」という記述があります。26ページの冒頭にはソーシャルワークのことと書いてあるので、そこに合わせてこの「ケースワーク上の課題」はソーシャルワークと修正したほうがよいのではないかと考えます。

というのは、里親委託の場合には、対応する主体がとても多いと思います。実親父母、養親候補者の父母、子供、そのきょうだい、乳児院や児童養護施設、フレンドホーム等、区役所、東京都との関係もあると思いますので、ソーシャルワークという言葉にしたほうがよいのではないかと考えます。

以上でございます。

○横堀部会長 その点はいかがでしょう。

現場ではこれまで、圧倒的にケースワークという表現を使ってきたと考えますが、ソーシャルワークを実際に手がけているものと思いますので、御検討いただけたらと思います。

それでは、ほかの委員の皆様も、10ページ以降、13ページまでの間でいかがでしょうか。

もう少し課題として強調してほしいことなどあればお聞かせいただきたいと思います。

どうぞ。

○林委員 どこでどう言えばよいか悩むところなのですが、先ほどの9ページの「(5) 年齢区分別 里親委託率(令和5年度末)」のデータからすると、3歳未満の里親等委託率が14.4%と。学童期の委託を増やすべきという主張が見られるのですが、3歳未満は予想以上に非常に低いというか、おそらく欧米、オセアニアではここを100%にしているわけですね。100%にすることで、平均値が5割を行くと。当然、学童期が少なくなるのは諸外国も一緒なのですが、ここで稼がないと本当に委託は進まない。それが14.4%ということに対する危機的意識のほうが、学童期よりも必要ではないかと思いましたが、ここで指摘すべきなのは分から

ないのですが。

もう1点、今ぱっと見て気づいたところでは、12ページで「(2) 子供(里子・実子)の意見の尊重」と。確かに、子供の意見を尊重すると、児童福祉法の第2条にもそういう規定があるのですが、一体、子供の意見を尊重するとはどういうことなのか。子供の意見の具体化をするわけではないわけですね。どうレスポンスするかという説明責任とか応答責任が求められることなので、その書きぶりを考えたほうがよいのかなと、ふと思いました。

以上です。

○横堀部会長 ありがとうございます。

その辺りはいかがでしょうか。

○育成支援課長 まず、今2点御指摘いただきました。

学齢期の措置変更も含めた里親委託も重要ではあるけれども、特に3歳未満にもっと力を入れるべきではないかというところですよ。

こちらですが、第3章でも、特別養子縁組の推進とかそういった中で、乳児院で一旦受入れはお願いするのだけでも、そこから更になるべく早期に里親、あるいは特別養子縁組を進めていくところで、もちろん3歳未満も積極的に進めていくという考え方は東京都としても持っています。

一方で、乳児院という体制が東京都内の場合ですと他自治体に比べると体制整備が進んでいるところでもありますので、現状乳児院という資源をしっかりと活用しながら、一方で、乳児院に委託してそのまま施設委託ということではなくて、乳児院で一旦受け入れていただきながら、そこから早期の里親委託、あるいは特別養子縁組に進めていくことが、3歳未満の委託推進につながっていくのではないかなというように現状東京都の考え方となっております。

もう1点の子供の意見の尊重というところですが、こちらは、例えば書き込むとしたらこの辺りにもっと書くべきではないかといったような具体的な御意見があれば検討させていただきたいと思いますが、何かございますでしょうか。

○林委員 考えさせていただきます。

○横堀部会長 ありがとうございます。

改めてアイデアとして、あるいは御意見を後日いただけたらと思います。

今触れていただきました、先ほどの現状の確認の9ページです。乳児院入所児、3歳未満の子供の委託が低いという辺りは、乳児院の機能をどう考えていくかも併せての課題として、後にも連動する点としてお聞かせいただきました。

里親委託促進の検討は、里親制度の中だけ考えることなく、連動する社会的養護全体、ひいてはさらに広い社会的養育との連動も考える必要があります。総合的に考えていくことが迫られる時代ですので、そういう意味では併せての検討が必要ではないかと考え思います。

地方では、乳児院が丁寧にアセスメントをして、先ほど出てまいりましたケースワーク、ソーシャルワークを関係機関と一緒に進めたところ、入所数が減ってきた中で、一時保護委託や乳児院の力量を生かした業務を機能として残しつつ、地域の子育て支援等とも大いに連動しながら、機能の再編成をしているような乳児院もあるようです。長田委員も委員として入られていますので、関連付けて考えていくことを部会の議論に今後位置づけていただけたらと思います。

長田委員、一言ありますか。

○長田委員 ありがとうございます。

視点がずれるかもしれないのですが、施設等の活用も必要だと思い、ぜひ使っていただきたいと思いますし、連携していくことの大事さみたいなのところもあると思います。

また、今回の記載で、フォスタリング機関や里親支援センターの記述がないので、おそらく現時点でまだ立ち上がったばかりで、里親支援センターも2か所という現状でこれからつくっていく中では、課題になっていて、数が多い分だけ、質の担保と、それぞれの機関の強みをどう生かしていくかというところが、地域ごとの強みだけではなくて相互に強みを生かし合うところをやっていないと、東京都ではなかなか難しいのかなと思いますし、子担当児童相談所管内と親担当児童相談所管内はエリアが違ったりもしますので、連携していくことは必要になってくるようにも思います。

もう1点、養育者となる人材の確保も大事なのですが、育成していくことがとても大事で、最初は気持ちだけで里親登録してくださる方は多いですから、その中で、どのように研修であったり、フォスタリング機関、里親支援センターも含む職員たちが関わることで、共にやっていけるかというところまで持っていくことがこれから大事になっていくと思いますので、そういった部分も課題として書いてもよいのかなと感じました。

○横堀部会長 ありがとうございます。

この部分は関連させて、私からも1点お出ししたいと思います。

10ページの「1 制度運営上の課題」の「(1) 未委託家庭への対応」の上から4点目です。○の4つ目に「未委託家庭の活用」という言葉が出てきます。2つ目の○にも出てきます。未委託の御家庭を放っておかない、里親の意欲が下がり切らないように関わっていくことがなかなか難しいため、模索されていることが書きぶりの中に含まれています。養子縁組里親については、なかなか児童の紹介ができないのでずっと待っていただく、二重登録を打診する等試みられています。今回もフォーカスされている部分になります。委託する側の表現では未委託家庭の活用という言葉になります。私もそのような表現に慣れているのですが、里親の側からすると未受託家庭です。受託に向いていくことができない家庭の事情を児童相談所と共有している場合もありますが、子供との出会いがないまま推移する私たちはどうなるのかという場合もあると思います。他自治体の実践を見ていると、未受託の家庭の研修の機会があったり、未委託家庭の里親にイベントで力を貸してもらったりすること、つまり放っておかれないことで育ちゆく機会を提供している実践もあるようです。「未委託家庭の活用」は委託する側の言葉ですが、先ほど長田委員が言ってくださいました育成の点もこの機会に言わせていただきました。

ありがとうございます。

お願いします。

○中村委員 ありがとうございます。

そんなに大きなところではないのですが、13ページの「4 児童相談所におけるケースワーク上の課題」に、「(1) 実親の同意を得るための組織的ノウハウが未確立」という記載があるのですが、ノウハウが組織的に確立されていないとは具体的にどういった意味を指しているのか。実際は、児童福祉司が単独でやることはなくて、現在も上司から意見を聞きつつとかチームで会議を持ちつつとか、そういったことでやっていると思うのですが、ここが具体的にどういった意味で確立されていないという記載になっているのか、その

点を確認させていただきたく申し上げました。

○横堀部会長 どなたかお願いできますでしょうか。

○家庭支援課長 実際のケースワークは、今中村委員からお話があったように、個々のケースを踏まえて、児童相談所でチームとして検討した上で、実親に対して御説明しているところであります。

すみません。ノウハウを具体的にどうするかというところまで整理していないので、答えが難しいところなのですが、より実親に理解いただけるような御説明が組織的にできればという意味で書いているところでございます。

○児童福祉相談専門課長 現場の立場で補足させていただきます。

実際には、例えば親に対して連絡がつかないと。微妙につかないケースもあるわけです。その段階において、家庭裁判所において２段階申立てなどの制度があるのですが、どの段階でそれをすればよいのかということは実例を蓄積する必要があるとか、例えば他県に親族がいるのだけれども里親にどういう仕組みで委託するのかとか、そういうところもあり例がなかったり、そういう発想がないという現状もありますので、その辺りについて蓄積していく必要があると思っています。

○横堀部会長 中村委員、いかがでしょうか。

○中村委員 ありがとうございます。

それを「組織的ノウハウ」と言うのかどうかは、検討してもよいのかなと。

今の説明自体は十分に分かりました。

○横堀部会長 受け止めましたね。

もし違う表現の工夫ができるようでしたら、この部分は現場との確認を踏まえてお願いしたいと思います。

ありがとうございます。

渡辺委員、どうぞ。

○渡辺委員 ありがとうございます。

まず、１１ページで「２ 里親への支援上の課題」ですが、里親への支援上の課題というより、里親家庭への支援上の課題なのではないかと思っています。里親だけではなくて、家庭という共同体への支援の話だと思うので、家庭が抜けてしまうと照準がぶれてしまうのではないかと思います。

「（３）継続支援のための体制やノウハウの不足」はチーム養育の体制やノウハウに不足があるところだと思うのですが、不足があるところとはそれぞれの理想があってこれが足りないということだと思うので、そもそものチーム養育はどのようにつくったらよいのかが全く言及されていないのに、不足、不足と言っている、ただお金を突っ込むだけになってしまうというか、効率的なお金の使い方にもならないし、人のリソースを割くことにもならないので、理想的なチーム養育の体制は何だったのかという目線合わせが必要なのではないかと思ったのと、今までの会議でこういうチーム養育の在り方がよいのではなかろうかと色々な事例が出てきていると思うので、おそらくそれを書いたほうがよいのではと思っています。

次に、１２ページです。「３ 児童への支援上の課題」ということで、まず、ケアニーズの高い児童についてなのですが、何がケアニーズが高く何がケアニーズが低いのかというところについて資料上で補足が全くない中で、ケアニーズ、ケアニーズと最近の流行りの言葉を言

ってもあまり意味がない気がするので、その部分は検討していただいたほうがよいと思います。今確かに国でも何がケアニーズなのかという指標が出ていないので、非常に難しいことを言っているのも分かっていますし、一応、自分も国の検討委員ですが、ちょうどこの議論が始まったばかりなのでまだまだこれからなのですが、東京都の中でケアニーズが高いのは何なのかと出しておかないと指標にならない気がしました。

もう1点、そもそもケアニーズという言葉。ケアニーズの高い低いで子供のニーズは捉えられないのではなかろうかと思っています。

これは理念の話になってしまうのですが、そもそも子供のニーズに大人側が応えられていないだけの話なので、この書き方はさも子供に責任を負わせているような表記になっている気がするので、そもそも違うということをここでお伝えしておきたいのが一つ。

施設における養育が望ましいというのは、施設は何の役割を持っていてどういう特徴を持っているのかがそもそも言語化されていないので、その指標も書いたほうがよい。例えば里親であれば、本当に家庭の中に招き入れることになるので、そこまで福祉、保育の勉強をした人でなくてもやってもらえるのが逆によいポイントである。施設は何がよいかといったら、そもそも専門的な訓練を受けて施設に入職しているという、そういうところの明記がないのに、「施設における養育が望ましい児童」とは果たして何なのか、施設はどういう役割を持っているのかが書かれていないので、書いたほうがよいかなと。

次に、「（2）子供（里子・実子）の意見の尊重」。これは何で必要なのかが書かれていない。今まできっと里子とか実子の話を色々とヒアリングされてきている上でのテキストだと思うので、そこに当事者の声があるとこの意味が分かるのではなかろうかと。声を聞かれるという経験そのもの自体がそもそもウェルビーイングの話なので、子供自身のウェルビーイングを実現するための1個の手段に、子供の意見を聞く、子供の話を聞く、子供だけの話を聞いてくれる子供専属の大人をつけるという意味合いだと思うのですが、そこはもう少し突っ込んで言及しないと、なぜ意見を尊重することが大事なかが分からないというのが1点。

続いて、13ページの「4 児童相談所におけるケースワーク上の課題」の「（3）子担当が里親等委託を検討・調整するための環境」です。

これは、当事者からの目線なので話半分にはしないで聞いていただければと思うのですが、「里親委託後は里親担当の児童相談所と子担当の児童相談所が連携してチーム養育体制の一角を担う」という形を書いているのは結構違和感があって、子供からしても、きっと養育者の方からしても、児童相談所は結構力を持っているのです。別に一角を担っていないというか、言い方は悪いですが、お上みたいな感じというか、最終意思決定者のイメージなのです。それだけ責任があるのに「チーム養育の一角を担う」と言うと、責任から逃げているように見えてしまう。そもそもそれだけの意思決定において、責任が存在します。その中で、結局ケースワークのマネジメントは児童相談所がやるはずなので、どこの自治体もケースのマネジメントは誰がやるのかということは、みんなそれぞれ、結局は児童相談所でしょう、結局は児童相談所だねみたいな感覚で話しているのが非常に気になるのです。ですから、ここで、マネジメントは児童相談所がやります、そのためのアセスメントの情報を提出するのが各施設の役割ですと明記しないと、同じぐらいの意見を同じようにイーブンに検討して、最終意思決定するのは児童相談所ですと書かないと、そもそもの意思決定の責任の所在がふわふわしているからうまくいかないのだと非常に感じるのです。ですので、「一角を担う」という表現は、そもそも間違え

ているなと私は感じています。

もう一步踏み込んで、今度は、子供だけの課題の話が全く載っていない。委託するまでのケアニーズの話とか、委託後からのケアニーズが変わっていく話、ケアニーズという言葉を使うなど言いつつ言ってしまうているのですが、その話しか載っていないくて、子供の人生は里親家庭を離れた後も続いていくわけです。その部分に全く言及されていないのが気になります。

私は若者支援のアフターケアの団体で働いているのですが、里親家庭にいる子供に連絡がつかつかないかという調査をしたときに、子供自身がいなくなってしまうみたいな、結構連絡がつかないケースがあったりするのです。ですので、関係性が途切れてしまうことも1個の課題だと思うのです。おそらく児童養護施設であれば養育の場面でたくさんの人たちが見るから誰かしらとは何だかんだつながっていたりするケースもあったりするのですが、そもそも養育するチームのパイが少ないから関係が切れてしまうみたいなことが結構あるのです。そのようなことが全く書かれていないし、子供の自立についてきっと悩んでいるフォスタリング機関の方は、多数御相談いただくので、いらっしゃるはずなのですが、その部分が全然書かれていない。里子の18歳を過ぎた後の自立の話と、家庭復帰するまでのケアの話も、どのように移行していくところに難しさがあるのかが書かれていない。養育するまでと、養育している最中のことしか課題として書かれていないくて、人の人生としてのストーリーが全く見えない感じがするのが全体的な印象です。

ですので、そこで東京都として何ができるのかという書き方をしたほうがよいと思ったので、もう少し包括的に見た課題の把握がおそらく出ていると思うので、そこを書いてもらえたらよいなと思いました。

以上です。

○横堀部会長 色々な点を言及いただき、ありがとうございました。

書きぶりで工夫するところと、基準、ガイドラインを確認するところがありそうです。例えば、専門養育家庭への委託が限定的という点について、どういう基準で委託しているのか、おそらく都としての説明言葉があると思うのです。課題表記について書き込めるところは書き込んでほしいという御意見にも聞こえてきましたので、そういう観点で文章を見直していただくことかと思いました。

それから、第2章のタイトルが、「里親等委託の推進における課題」という大きなタイトルですが、今回どこまでの検討をするのかという問いも含まれていたと思います。

例えば実親家庭への家庭復帰の促進や家族との関係の再調整は大事なことで、自立後も色々と課題状況を抱えている当事者はいるしと、色々な点がと頭をよぎります。ですので、取り扱う範囲、光を当てるポイントを確認していただき入れておこうとなれば今回入れるとなってくるだろうとお聞きしました。

渡辺委員、ありがとうございました。

当事者の御意見を話半分には聞いていないと思いますので大丈夫かと思います。

ありがとうございます。

それでは、林委員、よろしくお願いします。

○林委員 12ページの「3 児童への支援上の課題」の「(1) ケアニーズの高い児童の増加」は、ケアニーズが高いから施設養護が当たり前みたいな捉えられ方がされるのか。つまり、ケアニーズが高いというのは、支援体制との相関で考えなければならないと思うのです。高機能

化と、その機能の社会化は、社会化の対象として里親養育も入れていただきたいし、そこはどちらかでもなくて、施設の強みと里親の強みを相互に生かし合うような、本来的には東京都独自の二重措置みたいな在り方も含めて検討すべきかと思います。施設で暮らすことが当たり前の子供はいないと思うのです。

そこは考えていただきたいのと、どこで申し上げようかなと思ったのですが、トラウマインフォームドケアという理念であり、考え方がかなり定着してきていると思うのです。先ほど組織の職員の育成の問題、あるいは個々の子供への二次被害を予防する上でも、チーム養育の中で基本的に共有しなければならない養育観は、不調を防止する上でも非常に重要なことで、こういう実践上の課題だけではなくて、理念的というか、養育観というか、その辺りをきちんと押さえる必要があるのかなとも思いました。

以上です。

○横堀部会長 ありがとうございます。

今日は四条委員もおいでです。養育の現場では、里親家庭もファミリーホームも、ケアニーズの高い子供を受託していると言いたいような状況ではないかと拝察しますので、言葉としてどう使うかという点がありますね。

それと、林委員がさらりとおっしゃったのですが、東京都ならではのいわば二重措置のような考え方は、私も一度ぜひお出ししたいと思っていたところです。例えばこの乳児院につながりながら、この里親が養育しているというような、つながりを絶たない養育のあり方です。今まで措置制度の運用にあたって、施設か里親家庭か、一方を絶つ必要があるケースもあったと思いますが、これからはつなぐソーシャルワークかと考えています。つながり合いながら協働の養育をつくっていくことを模索するという意味です。対応の難しさを里親が感じることは多くあると思いますので、養育の協働性をめぐって今回、理念、考え方の整理がある程度できるのであれば書き込んでおくことも一つかなと思います。

二重措置は議論が要ることだと思いますので、別の機会にお願いできればと思いながらお伝えした次第です。

それでは、先を急ぎたいと思います。第3章の中間報告の文案につき、具体的に御指摘を重ねていただけたらと思います。

それでは、「第3章 里親等委託の推進に向けた取組について（中間報告）」の「取組1 登録家庭数の拡大、制度運営の見直し」の論点1から論点7ですね。「取組1 登録家庭数の拡大、制度運営の見直し」が、14ページから20ページの上部までなのですが、まず、このパートにつきまして10分ほどの時間を取り御議論いただけたらと思います。

具体的にどんどん出していただきましょう。

慶野委員、お願いいたします。

○慶野委員 「論点7 里親・ファミリーホームへの費用支弁」の話についてなのですが、措置費に関して「物価高騰に応じた一般生活費の水準の検討が求められる」などの記載があります。その方向には大いに賛成なのですが、本当に適切に上昇していただけるのか疑問と不安がありまして、冒頭の渡辺委員の発言に結構共感したのですが、思ったより結構ふわっとした言い回しが多いなと感じてしまったところもありまして、数えたら「検討が求められる」は30回書いてあったのです。これは揶揄しているわけではないのですが、どこまでどう検討してもらえてどこまで変わるのかというところが不安だったのです。ですので、特に金額の話、措置費だ

けではなくてほかの様々な金額の話に関しては、明確に「上げて」と書きたいなと個人的には思っています。且つ、本当に迅速に適正な金額アップが実現する仕組みを何らかそれぞれ投入していきたいと思っています。例えば全然違う話なのですが、年金におけるマクロ経済スライドとかであれば、世の中の賃金とか物価の上昇に応じて、とある条件が整うと自動的に発動するではないですか。それぐらい実行力のある仕組みで、迅速に子供本人と現場にお金が届いてほしいと思うのです。なぜこう思ったかという、ほかの論点で、フレンドホームの謝礼金が見直されずに据え置かれているという指摘があったと思うので、様々な支給の金額に対して動かなかったら困ると思っています。ですので、「検討が求められる」と、もしかしたら東京都的にそういう書き方しかできないのであれば仕方がないかもしれないのですが、改善できるのであれば、上昇が求められる、もしくは、物価高騰に応じたこのような金額の決定プロセスを新たに導入することが求められるぐらいに明言したいと思います。書きぶりの枝葉末節にこだわりたいわけではないのですが、せっかく盛り込んで、これだけ話し合った改善点を着実に実行力があるものにするために、工夫できる余地があればぜひしたいなという意図での発言でした。

以上です。

○横堀部会長 ありがとうございます。

費用が絡むところをどこまで鮮やかに書けるかということはあるかと思うのですが、一度御検討いただけたらと思った次第です。

ありがとうございます。

それでは、ほかの方々も色々なパーツで御意見をお出してください。

いかがでしょうか。

中村委員、どうぞ。

○中村委員 細かい文面なのですが、17ページの「論点4 施設から里親等への措置変更の促進」の「(3) 当面の取組の方向性」の1つ目の○なのですが、「児童相談所が里親委託に対する認識を持ち」とありますが、ここのテーマは施設から里親等への措置変更の促進なので、児童相談所が施設から里親等への措置変更の促進についての認識を持ちとか、そういった記載をしないと単なる里親委託の認識ではあまりに漠といたしますか、テーマに則していない。そういう意味で、施設から里親等への措置変更の促進についての周知を徹底する必要があるとか、そのように具体的に書いたほうがよいのではないかと思った次第です。

○横堀部会長 書きぶりの御提案かと思しますので、また御検討ください。

どうもありがとうございます。

ほかの方々、いかがでしょうか。

岩田さん、お願いします。

○里親支援センターともがき 岩田センター長 里親支援センターともがきの岩田です。

同じく、17ページの「論点4 施設から里親等への措置変更の促進」の「(3) 当面の取組の方向性」について、児童相談所の職員が認識を持ち、理解を深めるとか、施設機能との連携の一層の推進と記載いただいております。これは確かに施設からの措置変更を増やしていくためには重要とところだと認識しておりますが、現場の感覚的なところで申し訳ないのですが、それを児童相談所の担当者の方や施設の職員が里親制度の理解を深めて、里親のお宅で子供が生活したらどうなるかということをイメージして、アセスメントして、この子を里親委託の候

補としましよと持っていくのは、時間がかかるのではないかと考えております。

「当面の取組の方向性」は、短期的な取組であると冒頭に御説明があったと思いますが、児童相談所には今一体的にフォスタリング機関が入っているとか、里親支援センターが立ち上がっている自治体もある中で、児童相談所や施設が行う子供に対するアセスメントに、里親家庭の生活を知っている、イメージができる専門機関が関わっていく体制が取れると、時間をかけて育成をすることと併せて、短期的な取組ということで、方向性としてはひとつアプローチになるのではないかと感じておりますので、そういった現状のフォスタリング機関等の活用についても御検討いただければと思います。

以上です。

○横堀部会長 ありがとうございます。

大事な意見を頂戴したと思います。またそのようなことを反映できたらと思います。

何か一言ございますか。

○育成支援課長 御指摘のとおり、フォスタリング機関がございますので、その活用はしっかりと考えていきたいと考えております。

当面の取組は、具体的に令和8年度に向けてというところで記載しておりますので、必ずしも課題に対する全てのアンサーになっていないのは、まさに御指摘のとおりかと思ひます。

フォスタリング機関、里親支援センターは、東京都として引き続き令和8年度に検討していきたいと考えておりますので、そのところで、第3章に今御指摘いただいたものを書くのがよいのか、第4章のほうがよいのかというところは、少し検討させていただきたいと思ひます。

○横堀部会長 ありがとうございます。

冒頭で確認いたしましたように、こういう点について検討していく必要があるとか、こういう点は課題としていく等、書きぶりが混じっていますのは、まだ中間報告の文章だからであります。ですが、だからこそ入れておくべき文言について頂戴したいという段階ですので、どうもありがとうございます。

さらに具体的にお出しいただけますか。

長田委員、いかがでしょう。

○長田委員 長田です。

16ページの「論点3 フレンドホーム制度の積極活用」なのですが、積極的に活用するのであれば、東京都の場合、フレンドホームは里親研修を受けて里親登録された方ではなく、登録しなくても制度を活用できるという形ですし、施設に登録するので研修を受けなくても大丈夫という状況にあります。

しかしながら、フレンドホーム制度は宿泊を伴うようなものになりますので、しっかりと研修していただいて、こちらとしてはその御家庭が適しているかどうか、きちんと子供のことを最善に考えて受け入れてくださる御家庭なのかということをしっかりと見ていかないといけないのかなと思ひますし、制度自体も建付けてから何年もたっていますので、もう一度その枠組みも含めて、研修内容や報告書の出し方といったことも含めて整理する必要があるのかなと思ひますので、「(2) 課題」や「(3) 当面の取組の方向性」に少しそういった部分も載せていただけるとよいかと思ひました。

○横堀部会長 どうもありがとうございます。

今、研修という言葉が出てきました。どこに書き加えるかは課題なのですが、私も、里親、

フレンドホーム、あるいは未受託の御家庭の総合的な研修体系の在り方を一度課題として考えたいと思います。

更新研修の受講も、以前は東京都は丁寧に養育家庭については2年に1回受けていただいているシステムでしたが、5年に1回に再編成されています。

また、フォスタリング機関が企画・構成する研修等も里親に声かけし研修計画を立てることもあると理解しています。子供と出会った里親が子供理解を深め、養育を安定的にしていくための質的な支援をどのようにしていけるかを考えますと、色々な研修がある中、それらをトータルでどう描くかを考える一つの大事な時期ではないかと思います。

ありがとうございます。

そのほかの委員の方、いかがでしょうか。

渡辺委員、お願いいたします。

○渡辺委員 またケアニーズの話をして申し訳ないのですが、16ページの「論点3 フレンドホーム制度の積極活用」の「(2) 課題」の1つめの○で、これも文章の書きぶりが非常に気になるというか「フレンドホームとの交流の対象とする児童の推薦には、慎重な対応が求められている」は、子供が暴れてフレンドホームに御迷惑をかける可能性を秘めているからという受け取り方ができてしまうのです。この表現も子供に対して非常に失礼な表現だと思うので、変えることを積極的に検討していただきたいと思っています。

19ページの「論点7 里親・ファミリーホームへの費用支弁」についてなのですが、先ほど確かに明確に書いたほうがよいという意見もあったのですが、一方で、明確に書いてしまうと、逆に今度は里親という仕事をビジネス化して、子供をいっぱい受ければ受けるほど措置費がいっぱい取れる、要は、副業としてできるというような捉え方をされたら、またそれはまずいわけです。ですので、きちんとお金が適切に子供に使われているのかとか、お金がしっかりと子供のために貯蓄されているのかみたいなところについても、しっかりと書いておかないと。現に里親家庭で育った子供で里親にお金を全部使われてしまって18歳で出るときにはすっからかんというケースが、大きくうなずいている方がたくさんいますが、私もそうだったので、本当にお金がないまま児童養護施設に移って施設の先生がびっくりするみたいなことが結構あったので、その部分は課題でもあると思うので、そこに対するアプローチはどうすべきなのか、しっかりと書いたほうがよいかと思いました。

一旦は以上です。

○横堀部会長 どこまで書き込むかで、検討させていただくことかなと思いました。

どうもありがとうございます。

ほかはいかがでしょう。

次のパーツに緩やかに移ってまいりたいのですが、よいですか。

私は1点申します。

「論点6 ファミリーホームの設置促進」についてであります。

以前の議論でも申し上げたのですが、あくまでも家庭養育としてのファミリーホームをどのように増やしていくかということを、軸として、理念として持っておく必要があると考えています。

平成24年の児童福祉法施行規則、実施要綱の改正の際、養育者がそのホームの中に住み、基本は夫婦をモデルとする養育形態を厚生労働省が示し、家庭養育であることを改めて確認し

たわけです。今後改めて法人運営の法人型、今東京都内にはないようですが施設職員型等を模索することになります。ファミリーホーム開設の支援と運営の支援、設置者への支援等、色々な面での取組課題が考えられるだろうと思います。その議論の中で、どういうファミリーホームを増やしていくのかは、関係者のヒアリングを経て議論すべきところだとも思いますので、現時点での言葉としては可能な表現で載せておいていただけたらと思っていますところ。

それでは、堀口委員、お願いします。

○堀口委員 堀口です。港区児童相談所です。

「論点4 施設から里親等への措置変更の促進」のことで確認したいことがございます。

施設に入った子供を改めて養育家庭、里親家庭に移すことは、パーマネンシーを保障するという意味で移すということによろしいかという確認と、なぜならば、私も経験上、施設から養育家庭に行き、不調になり戻り、一時保護に行きということ、色々なことが分断されながらぐるぐる回ったケースがありましたので、ここにも書いてありますが、そういった分断されないような支援みたいなことは何か検討があるのかどうか、どういうことをやったらそこが分断されずにパーマネンシーが保障できるのかというところで、もし何か案があればお聞かせいただきたいと思います。

あと、この先養育家庭の委託数が増えていくとしますと、欧米とかにあるようなドリフトの問題とかもきつと出てくるのではないかと思います。その辺りも何か対策があるのであればお聞かせいただきたい。

現在では、養育家庭が不調になれば、一時保護、施設という流れになってきていて、児童養護施設でも駄目だったら児童自立支援施設に行くような子供が一定数おりますので、その辺りをお聞かせいただければと思います。

○横堀部会長 17ページの課題提示であります、何か答えられるお言葉はありますでしょうか。

○育成支援課長 まず、施設からの措置変更の推進の検討につきましては、御指摘のとおり、パーマネンシー保障の一つの考え方としまして、いわゆる永続的な家庭養育の推進という意味で、施設から家庭というところはひとつ検討が必要ではないかと。

ただ、その際に、御指摘にもありましたとおり、それで分断が生じてしまうことはよろしくない、より広い意味でのパーマネンシーと考えたときに、施設から家庭に移った後も引き続き施設との関係性が切れなような継続性とアフターケアも含めて検討が必要ではないかという視点は持っております。

ここの論点、尚且つ、当面の取組としてはそこまで書き切れていないところではあるのですが、引き続き令和8年度の検討も含めて、そこは課題として認識しております。

更に、ドリフトの問題。不調が生じたときに、結局、里親からまた施設に戻ってくると。委託を推進すれば、当然、全体の数が増えれば割合として実数、不調の数も増えるところはある程度避けられないところはあるかと思います。

ただ、なるべくそれが起きないように、あるいは起きたとしてもそのフォローをどうするか、また、起きないようにするためにはマッチングをどのように進めるのかというところは課題として考えてございます。

どうするかという答えは、今ここで何かお答えとしてお示しできるわけではないのですが、課題としては我々も認識しているところです。

○横堀部会長 堀口委員、いかがでしょう。

○堀口委員 ありがとうございます。

アフターケアについては、数十年やっているのではないかと思うので、具体的にどのようにしていくのか。アフターケアをしても今まで駄目だったので、どういうアフターケアが大事なのか、アフターケアだけで大丈夫なのか、アフターケアをしていく中で、いずれかは施設を引いていって、養育家庭の生活を中心にしていく中で不調が起こってきているところもあるので、ここでは中間のお話ですので、いずれまとめるときに、これを推進していくのであればそこは具体的にどのような支援が必要なのか検討されていかれるとよろしいのではないかと思います。

ありがとうございます。

○横堀部会長 皆様、ありがとうございます。

それでは、時間もあと30分ほどとなりましたので、20ページ以降で色々なポイントを出していただけたらと思います。

取組2、取組3、取組4、その他と続きますが、どうぞ具体的にまたお出してください。

いかがでしょうか。

慶野委員、お願いいたします。

○慶野委員 「取組4 ソーシャルワークの充実による里親等委託の促進」などについてなのですが、児童相談所の体制強化などの話が載っていますが、これまでの議論の中で、児童相談所の職員をはじめ、子供たちの支援をする大人の待遇が十分であるかという発言が、私以外の委員から何度か出たと思います。ただ、そういう待遇に関する記載がそれほどないようでしたので、何か載せていただきたいと感じています。これから児童の権利をより守って、そのためにより専門的で一貫性のある手厚いサポートが求められると、現場の方の負担は更に増えると思います。そんな中で、負担が増え、年次が上がっても十分に昇給が見込めないという状況では、その方自身のキャリアが持続可能ではないので、児童相談所の体制強化というゴールのために、その土台となる現場の方の待遇についても何か盛り込んでいただきたいと思っています。

○横堀部会長 ありがとうございます。

この点は何か言葉を模索して、可能であれば書き加えるということにして、御意見をうかがった形で進めてよろしいでしょうか。

ありがとうございます。

そのほかはいかがでしょう。

中村委員、お願いいたします。

○中村委員 23ページなのですが、「取組3 特別養子縁組に関する取組の推進」の「論点1 代替養育における特別養子縁組の優先的な検討」の「(2) 課題」の下1つ目の○で「『実父母の同意』以外の理由での申立経験に乏しい」とありますが、これをぱっと読むと「『実父母の同意』以外の理由」という意味が捉えにくいので、そこは補充されたほうがよいのかなと。

「論点2 児童相談所長による特別養子適格の確認の申立の積極的な検討」の「(3) 当面の取組の方向性」ということで、「児童相談所長申立てを行った事例を、事例共有システムを用いて」とありますが、特に上にあるとおり、実父母の同意が片方あるいは両方の同意がなかったケースで認められたケースと、申立てしたにもかかわらず却下されたケースを、重点的にシステムを用いて東京都全体で共有されるとよいかなと思いました。その点を申し上げたいと思います。

○横堀部会長 ありがとうございます。

では、付け加えての表記を模索していただけたらと思います。

ありがとうございます。

そのほか、委員の皆様。

岩田さんですね。 お願いいたします。

○里親支援センターともがき 岩田センター長 21ページの「取組2 里親等に対する支援の充実」の「論点3 フォスタリング機関事業の評価を踏まえた里親支援センターの検討」で、ここだけではないのですが、全体を通してフォスタリング機関の里親支援センターへの移行という表現が使われているかと思います。機関としては里親支援センターに移行するのかなと思いますが、この後に続く25ページの「論点4 縁組成立後の継続支援」などは、国の制度設計上はフォスタリング事業として残るものだと理解しておりますので、全体を通じてフォスタリング機関が全て里親支援センターに移行するのかということと、フォスタリング機関ではなく、事業としての養子縁組成立後の支援の検討についても追加して記載いただけると、併せて里親支援センターとしての里親支援の総合的な機能の検証につながるかと思いますので、御検討いただければと思います。

○横堀部会長 ありがとうございます。

フォスタリング機関、里親支援センターをどのように扱っていくのかと、事業としてどこをどう活用していくのかという課題ですね。整理が要るところだと思いますので、より分かるようにしていただけるとありがたいと私も思いました。

ありがとうございます。

そのほかお出してください。

どうぞ。

高橋委員、お願いします。

○高橋委員 高橋です。

21ページの「取組2 里親等に対する支援の充実」の「論点2 里親・里子・実子への支援の充実」と、その前の段階のレスパイトに関してなのですが、改めてフォスタリング機関ができて、自立を支援することが、今まで里親の御好意におんぶに抱っこだったところを、少し制度化なり、対応する体制を整えてきたのがこの間の変化かなと思っていて、それに伴って、児童養護施設はレスパイトという名前で自立訓練の機能があるお部屋があるので、そういうところで少し自活訓練の練習というか、一人暮らしの練習をするとか、そういう目的のレスパイト、レスパイトと言うのかは分かりませんが、そういう形でレスパイトとして施設でのお預かりを認めていただいているケースも少しあると伺っていたり、私の所属する施設も高齢児が来たときは、大きい子なので寮に入れるというよりは一人で過ごせるかなと様子を見ながら対応することをさせていただいていて、支援の充実では、自立の辺りは渡辺委員もその後の支援のこともお話しされていたと思うのですが、何らかの形で課題として出して、対応できる仕組みを更に充実していったほうがよいのかなと考えています。

里親も、委託解除された後なのに奨学金の窓口だったり、保証人で継続的に名前を出さなくてはいけないのは、思いはあるけれども制度としてどうなのだろうという御質問もあったりと聞いているので、そういったことも含めた支援の体系、児童自立生活援助事業（3型）にすればよいだけではない方法がないか、考えられればと思っています。

○横堀部会長 どうもありがとうございます。

20ページの里親間でのレスパイトの辺りも含むことであったかと思います。

せっかくこのあたりを出していただきましたので、施設でのレスパイトの意味を考えて、どういうことができるか改めて整理していくことに付随させてお話ししておきたいと思います。

先ほど林委員から二重措置という言葉がさらりと出たとコメントした部分にも関連します。里親宅でのレスパイトの受入れは意図があって活用してきたものだと思います。それはどうしてだったかせっかくですので説明として載せたらどうかと思います。一方どのように限界があるかも書き込んでいただけるとそこが分かるかと思います。それから、他の自治体でもしていますが、施設でのレスパイトの受入れは、東京都でも、児童相談所が了解すれば実施していると思います。家庭養育が施設とつながることでのメリット、色々なプラスの要素があるだろうとも思いますので、そういう観点も整理して、レスパイトの在り方も確認する機会にしていたけるとよいと思いました。もう少し言葉を増やすことがあれば、私は後で御提案しようかと思っておりました。

ありがとうございます。

林委員、どうぞお願いします。

○林委員 今の高橋委員の御意見をお聞きしていて、最初の9ページまでの「第1章 里親等委託の現状」の基本的なデータに、児童自立生活援助事業（3型）の活用状況について、データとして出していただけたらと思いました。終結が非常に難しいと思うのです。特に高齢児の女性などはメンタルの問題が限りなく続くというか、そこがきっとそれぞれ何をもって終結として考えるか、あるいはどこに引き継いでいくのかとか、そういうことを含めて、高齢児の支援の辺りのデータを入れていただけたらということと、項目の中にも必要かなと思いました。

あと、23ページの「取組3 特別養子縁組に関する取組の推進」の「論点2 児童相談所長による特別養子適格の確認の申立の積極的な検討」というのは、自治体によったら今特別養子縁組のケースはそんなに多いわけではないので養子縁組の適格性の申立てに関しては、全件児童相談所長の申立てにしているという都道府県もお聞きしたことがありますし、あるいは民間機関との連携の中で、民間あっせん機関の生みの親の同意が定まらないケースもあるので、そういうことを含めて児童相談所長申立てを積極的に活用してはどうかと個人的に思いました。以上です。

○横堀部会長 ありがとうございます。

その点については、まさに今後議論していくということでお預かりさせていただくことでよろしいでしょうか。

○林委員 はい。

○横堀部会長 ありがとうございます。

○林委員 もう1点が、度々申し上げていることですが、記録の取得から管理、開示の支援に至る一連のプロセスの管理、支援の在り方は重要なことかなと申し添えたいと思います。

○横堀部会長 ありがとうございます。

国が整えてくれているところとそうではないところがありますので、関連の動きを捉えながらも、東京都としてどうしていくかが、まさに子供のパーマネンシーの保障に直結する大事なことだと思います。ですので、課題のポイントとして頂いて、お預かりしたいと思います。

ありがとうございます。

そのほか、どうぞ皆さん、お出してください。

長田委員、いかがでしょうか。

お願いします。

○長田委員 長田です。

20ページの「取組2 里親等に対する支援の充実」の「論点1 里親向け子育て支援サービスの充実」なのですが、「子育て支援」と言うと乳幼児とか小学校低学年のイメージが強いかと思いますが、18歳まで預かる子供たちで、学校になかなか行きづらい子たちとか、送迎にも配慮が要る子供たちもおりますので、総合的に見て、どんな支援が必要かというところが書いてあったほうがよいかと思います。

「(2) 課題」は「レスパイトの受け入れには限界がある」ことだけですし、「(3) 当面の取組の方向性」も「育児家事援助者派遣事業の拡充」のみなので、もう少し学習支援ボランティアであったり、送迎の支援、同行であったり、共働きの御家庭も多いので、土日や遅めの時間帯とかに相談できる場所の確保みたいなところも課題になってくるかと思いますので、せっかくの場所ですので、そういった必要なところを里親とかにも聞きながら書いていただけるとよいかと思いました。

もう1点は、21ページの「取組2 里親等に対する支援の充実」の「論点2 里親・里子・実子への支援の充実」の「(3) 当面の取組の方向性」なのですが、書き方だと思うのですが、2個目の○で「子供のパーマネンシー保障のため、里親委託後においても、実親や親族との交流を継続的に実施する」と書いてあるのですが、子供によっては交流にどう配慮していくとか、それがどうかということも必要ですし、どちらかといえば家族再統合というか、親子関係をどう考えていくとか、その配慮をどのタイミングでどう伝えていくとか、ライフストーリーワークをどう取り入れていくか、子供にとってという部分で家族をどう考えていくかを私たちがどうサポートできるかという部分だと思いますので、これだと交流ありきみたいになってしまわないかという懸念がありますので、表記の仕方に工夫があるとよりよいかと感じました。

以上です。

○横堀部会長 ありがとうございます。

それでは、牛島委員に先にマイクを取っていただきます。

○牛島委員 ありがとうございます。

今のところで少し付け加えをさせていただきたいと思ったのですが、先ほど「取組2 里親等に対する支援の充実」の「(3) 当面の取組の方向性」で、育児家事援助者の派遣事業というところで、今もう少し具体的に18歳の子供たちを見据えてというお話がございました。それに加えて、今、「取組3 特別養子縁組に関する取組の支援」、「論点1 代替養育における特別養子縁組の優先的な検討」の「(1) 現状・これまでの取組」で、障害や病気等ケアニーズが高い児童は、縁組の成立が困難で検討自体乏しいみたいところが記載されていて、そういった子供たちに対しても、おそらくあるべきサービスが安全に提供されることで支援の拡充はできるのかなと思いますし、その辺りももう少し追記いただけるとよいのかなと考えました。

○横堀部会長 どうもありがとうございます。

書き込む言葉を少し足す必要があるのではないかという御意見でありました。

ありがとうございます。

そのほかにかがででしょうか。

林委員、お願いいたします。

○林委員 今言われた医療的ケア児とか障害児は、例えば病院の附属乳児院とか、その辺りが私も不透明だなと思うところがあって、そういう子供たちが生涯どういう生活を送っているのだろうかということが非常に気になって、一生涯施設で終わる方々もおられるのではないかととも思いますので、その辺りは何か示唆いただけるものがあればお願いしたいです。

あと、21ページ「取組2 里親等に対する支援の充実」の「論点2 里親・里子・実子への支援の充実」の「(2) 課題」の○の2つ目の「施設から養育家庭への措置変更の場合に、子供のパーマネンシー保障をする仕組みがない」というのは、ここでいう「パーマネンシー保障」は、リーガルパーマネンシーというか、養子縁組を保障する仕組みがないという理解でよいのですか。これは、例えば養育家庭だけ登録しているから養子縁組ができないという理解でよいのですか。

○横堀部会長 これはコメントをいただいてもよいですか。

○育成支援課長 すみません。

ここは表現が分かりづらかったので少し見直しを検討したいと思いますが、現状、施設から養育家庭への措置変更の際に、子供のパーマネンシー保障をする仕組みは、いわゆるおっしゃったリーガルパーマネンシー、特別養子縁組に限定してしまうと文脈が通じないので、措置変更した後も引き続き施設からの専門的な支援、ケア、あるいは関係性の分断が起きないようにと、先ほども御意見いただいたような文脈で考えておりましたが、表現に関しては少し見直しを検討させていただきたいと思います。

○横堀部会長 ありがとうございます。

大事な確認の点であったと思います。

そのほかにかがででしょうか。

渡辺委員、どうぞ。

○渡辺委員 まとめて言おうと思います。

まず、20ページを含めてなのですが「里親等に対する支援」が変だなと思っているので「里親家庭」と見たほうがよいのではというのが、重ねてなのですが。

○横堀部会長 すみません。

これは、里親プラスファミリーホームの意味だと思います。

○渡辺委員 なるほど。

里親家庭、ファミリーホーム。

○横堀部会長 併せて「里親等」と言うのです。

○渡辺委員 なるほど。

分かりました。

であれば、一旦パスで大丈夫です。

次に「取組2 里親等に対する支援の充実」の「論点2 里親・里子・実子への支援の充実」の、先ほどから挙がっているパーマネンシーの話なのですが、これは、子供のパーマネンシーという見方というか、この文章を見たときにパーマネンシーという言葉が出てきたときの印象として、実親や親族とかに交流させることが全てパーマネンシーの保障であるという認識でし

かないと言ったら変なのですが、それだけしていればパーマネンシーは保障されていますねという印象に取られかねないのです。実親、親族がいらっしゃらない子供も多数いるし、いたとしても親族になり得ない方々はいるわけです。そうなったときに、子供のパーマネンシーはこれだけがパーマネンシーなのですかと、非常に問われるテキストの書き方だと思っているのです。子供にとってのパーマネンシーは、結局、要は自分にとっての大切な人、それは友達であったり、学校の先生であったり、地域の第三の居場所で出会ってきた人たちとか、児童館の人たちとか、子供の生活の中で出会ってくる大人は多数いるわけで、そこを含めた交流と書かないと子供のパーマネンシーは保障されないと非常に感じているところなので、実親と親族だけでの交流が子供にとっては負荷がかかるケースがあったりするのです。ですので、そこは問うわけではないけれども、実親、親族にとどまらず、子供の生活の中で子供自身が大切だと思える人たちとの交流が子供の育ちをつなぐものなので、という書き方にしないと、これでは実親が機能しない子供たちや親族が機能しない子供たちは完全に落とされていってしまう表現だなと思いました。

里親支援センターの評価についてなのですが、児童福祉施設として位置づけられているのであれば事業の評価は第三者評価がやるのですよねということを一応確認しておきたいのですが、やられるのですか。

○横堀部会長 お願いします。

○育成支援課長 すみません。

現状、里親支援センターは、東京都としてまだ明確に位置づけができていないこともありまして、第三者評価をどうしていくかということもまだ検討できてはおりませんが、そこは御意見として受け止めてまいりたいと思います。

○渡辺委員 ありがとうございます。

であれば、もし第三者評価をやるなら子供がどう感じているのかということも評価に入れるべきなのではないかと思っています。

次が、24ページの「取組3 特別養子縁組に関する取組の推進」の「論点3 乳児院の体制拡充」の「(2) 課題」なのですが、きっと保護者の支援もしているから非常に大変なのだろうという印象があるのですが、その辺りはどうなのだろうと思っています。ですので、その文章があるかないかだけでも支援が大変なのかどうか、工数がどれだけ多いのかというところが見えてこないのも、もし本当に保護者の支援も含めて乳児院がやられているのであれば、その部分は書いたほうがよいのではないかと思います。

次に、26ページの「取組4 ソーシャルワークの充実による里親等委託の促進」の「論点1 児童相談所の体制強化」なのですが、そもそも里親家庭自体が社会的養護の中でもマイノリティーな分野でありますよね。且つ、児童福祉の中でもかなりマイノリティーな分野であると。そこに対する専門職の採用がなされているのか、いないのかということにおいて、体制がどう変わってくるのかということとは結構影響してくるのではないかと思います。専門職採用も、もちろん社会福祉士があるとか、精神保健福祉士があるとか、そういう福祉の専門職ということもそうなのですが、里親支援に対する知見のある方が児童相談所の中にどこまでいらっしゃるのかということが重要なのではないかと。以前メールで意見を送らせてもらったことがあると思うのですが、里親支援を外でやられてきた方とか児童養護施設でソーシャルワークをやられてきた方との人事交流は結構大事だなと、こども家庭庁を見ても思う

のですが、外から見ている人たちと、もともと中にいて外から見る立場になった人とでは、物事の解像度が全然違うのです。ですので、おそらくそこところは言及したほうがよいかなと思っています。

次に、29ページの「第4章 令和8年度に向けて引き続き検討を要する主な論点」、「3里親・ファミリーホームと社会福祉法人等との連携」の「ケアニーズの高い」という表記は、読み取ると、おそらくそれは心理的な意味合いで治療的であり且つ専門的なケアが必要な子供の話をしているのだと思うのです。ですので、そのように書かないとふわっとした言葉で逃げてしまっているように見えるので、心理的なケアや養育的なケアなどで専門的なケアが必要な子供というのがひとつ表現として必要なのではないかと。

次に「5 その他」なのですが、これはきっと「知名度向上」の一つに色々な意味が含まれているからこの言葉を選ばれているのは分かっているのですが、要は、里親家庭自体がなぜ知らなければいけないのかというと、そもそも里親になってくれる人たちが増えてほしいからというのが1点と、もう1点は里親自身が社会の中で里親として子育てしやすい社会の実現が必要なわけです。ですので、これはおそらく知名度向上だただ知らればよいのでしょう、知っています、犬、猫を育てる里親とは違うのは分かっています、ということに留まってしまうので、そうではなくて、里親の母数を増やしたいのと、里親自身が安心して社会で子育てできるように一般の都民や民間企業に対するアプローチが必要だというような書き方にしないといけないのではないかと思います。

以上です。

○横堀部会長 ありがとうございます。

先ほどの第三者評価も含めて、おそらくこれから色々と整理していくことを伺えたかと思います。

御意見の最後の里親制度に関する一般の知名度については、確かに私も書き換えたほうがよいと思った点の一つで。里親が子育てしやすいだけではなくて、その家庭で育つ子供が生きやすい社会にしていくことがあわせてゴールだと思いますので、せっかく出すのであれば書き添えるのも一案かと思いながら伺いました。

今、渡辺委員からケアニーズという表現のことや色々な書きぶりについて、どのように意味をその言葉の中に入れていくかという点が出されました。

社会的養育推進計画等の中では、用語の概念規定や用語の説明部分を作って掲載したように思います。中間報告で同様に全てそれらをつけるかは要検討だと思いますが、言葉について皆が同じ理解で読むことはとても大事だと思いますので、必要と思われるところについては、説明を書き添えるとか、どういう意図で使っているかということを書くのも一案か、最終報告も同様かもしれないと思いながら伺った面もごさいます。

どうもありがとうございます。

それでは、ずっと聞いていただきました大竹アドバイザーにも最後に少し伺ってみたいです。色々な点をくぐり抜けてきているのですが、いかがでしたでしょうか。コメントをお願いできたらと思います。

お願いいたします。

○大竹委員 ありがとうございました。

本当に活発な御意見、前向きな御意見を多数聞けたと思います。

事務局はこの声をまとめていくのか大変だなと思いながら、感想レベルになってしまうのですが、改めて0歳から3歳未満の子供の里親等委託率が15%というようなところでは、国も「はじめの100か月の育ちビジョン」では人格形成にとって100か月は非常に重要なのだと改めて言っていますから、3歳未満が15%というところは改めてこの数字を上げていかなければいけないなど。そこに何をしていかなければいけないのか問われているところかなと思いました。

あと、「第2章 里親等委託の推進における課題」の親の同意が得られないところで、新保副部長がおっしゃったAIでこの子供はと出ている、この子供が候補児童として挙がっている親の同意が得られないので候補児童になり得なかったといったことは、現状としてあるのではないかとこのところでは、親の同意が問題のところも少し課題としてあるのかなと。

そこには、里親制度がまだ正しく認識されていない。今後は、里親家庭と実親も交流しながら、里親家庭に委託したけれども家庭復帰ができたとか、本当に施設と横並びの養育里親といった里親の制度の在り方というか、理解も一つ周知していく必要があるのかなと思いました。

あと、東京都は、フォスタリングというところではしっかりと先行でやられておりますので、コメントの中にもありましたように、効果検証が必要だというところまでいくと、これまでやってこられた中で、フォスタリング機関がどのような役割を担って、これがどのように推進の役に立っていたのかということからは、改めて検証するようなことも必要ではないかと思いました。

最後なのですが、今回中間報告ということで、林委員もおっしゃっていた二重措置などという新しい言葉もありましたが、過去には里親は保育所利用ができないとか専業主婦でなければいけないということがどんどん変わってきているところでは、この推進に向けて、既存の制度の枠を超えて必要な制度、何が必要なのかということからは、私たちの専門部会で、制度の枠を超えてこんなことがあったらよいのではないかとこのようなことも積極的に検討できればよいかなと思ったということで、感想になりますが、私のコメントとさせていただきます。

ありがとうございました。

○横堀部会長 どうもありがとうございました。

大竹アドバイザーのお話をお聞きし言葉を添えて終わりたい点があります。

先ほど私自身の意見の中で、里親制度の内側だけ考えるのではなくて社会的養護全体を考える機会に、という点を申しました。施設の機能を改めて確認して、施設に何を期待して、何を担っていただくのかという辺りも、併せて検討することになるだろうと申しました。それらを添えておきたいと思いました。

もう1点は、区市町村中心でやっております様々な子育て支援や、いわゆる予防的支援との関係です。そういうフィールドとも地平をつなげなければいけないと考えています。

周辺領域から里親制度・養育実践の中に入ってきていただくには、社会的養護だけが特別な養育であるといった感じでは、社会的になかなか私たち皆のものにはなっていないと思います。ですので、色々なスタイルのつながり合いながら子育てする文化の中に、里親養育もしつかりとつながって存在できるような連結がこれからさらにできるとよいと思っています。里親制度の外との関係を調整するのもソーシャルワークですので、意識しながら検討していくことをこの先また必要に応じてできたらと思った次第です。

もう8時を迎えようとしているのですが、四条委員、すみません。今日は御意見を伺うこと

ができませんでした。

感想でもよいので、一言いかがですか。お願いします。

○四条委員 こんばんは。四条です。

本当にすごいことなのだなということしか感想が出てこないのですが、ファミリーホームとしてもっとファミリーホームが増えていったらよいな、しかし、その中でこういう条件であればビジネスになってしまうだろうなとか、渡辺委員もおっしゃっていましたが、里親がビジネスになってはいけないような制度であってほしいというのが率直な意見です。

毎回、本当に勉強になります。

ありがとうございます。

○横堀部会長 とても大事な点を最後にどうもありがとうございます。

無理やりマイクを握っていただいて、すみませんでした。

どうもありがとうございました。

皆さん、まだまだたくさん、細やかな意見から考え方まで出されたいだろうと思うのですが、この後にもお出しいただけるチャンスがありますので、その辺りを事務局から御説明いただいて、追加していったり、あるいは御一緒に考えていけたらと思います。よって、本日の議論は、ここまでとさせていただきます。

では、本日の審議は以上とさせていただき、事務局から今後の予定などの連絡事項をお願いできればと思います。

お願いいたします。

○育成支援課長 今後の予定ですが、本日の御意見も踏まえまして、中間報告の案を再度取りまとめた上で、令和8年1月22日の児童福祉審議会本委員会にて報告ができるように準備を進めたいと考えております。

追加の御意見等がございましたら、令和7年12月12日（金曜日）までに事務局までメール等で御意見をお寄せくださいますようお願いいたします。

いただいた御意見は、改めて横堀部会長にも報告、共有させていただきまして、最終的な取りまとめへの反映につきまして事務局と横堀部会長でまず一旦相談させていただいた上で、委員の皆様にはメールでフィードバックをさせていただきながら、本委員会まで時間が限られています、やり取りをさせていただければと考えてございます。

冒頭に御説明さしあげましたとおり、次回の部会につきましては、令和8年3月以降となる予定です。別途、改めて日程調整をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

事務局からは以上です。

○横堀部会長 どうもありがとうございました。

追加の意見をお出しいただけるチャンスを早速直近でいただきましたので、もし浮かびましたら、ぜひともお願いしたいと思います。

よろしくお願いいたします。

拙き司会で十分に意見を述べていただけなかった方もいらっしゃると思うのですが、御協力ありがとうございました。

本日の第5回専門部会は、これで終了とさせていただきます。

どうもありがとうございました。

次回もまたよろしくお願いいたします。

閉 会